



終末期医療

稲城市保健センター

☎378-3421

1年半前、ある医学雑誌に「死なせる医療」と題した特集記事が載りました。

内容は高齢者の終末期医療をどのように行うべきか、より良い看取りのためにはどのような考え方や方法がよいかといったことでした。なぜこのような特集が組まれたのでしょうか。

1つには日本人の高齢化があげられます。日本人の死亡年齢は上昇を続け、例えば女性の年齢別死亡数のピークは50年前は75〜79歳でしたが、現在は85〜89歳

となっており、この年齢は人間の限界寿命の上限に近付いてきていると言っている学者もいます。要するに医学的に治療の限界となりこれ以上の長寿は望めない可能性が高いということです。

2つ目は、死亡者の80%以上が医療機関で亡くなっているという事実があります。つまり医療機関において、限界寿命に近い高齢者に対してどこまで積極的な治療を行うべきかということを真剣に考えなければいけない時代になったということでしょう。

実際の医療現場では、そのような方針を決める際には、当然ご本人の意思が尊重されるのが理想です。しかし、現実的には認知症や精神障害などによってご本人に意思確認できないケースが非常に多く、ご家族の意見をもとに医師が治療方針やお看取りの仕方を

決めているのが現状です。具体的には、治療の差し控えや中止をどの時点で行うか、また病気による苦痛から解放する緩和ケアという考え方をどの時点から導入すべきかなどです。

これらのことを考えると、医学とは別にどうしても感情や人生観が絡み、方針が迷走することが多々あります。ご家族にとって「身内の死」といざ対峙することが精神的に厳しいことだからだと思います。ただ、より良い看取りをするためには、ご家族が「身内の死」と向き合うことも重要な要素となります。そのために、人間はいつか必ず死を迎えるということに対する心構えを普段から持つことは、大切なことだと思います。